

SKYMENU 活用授業 実践レポート

お名前	乾 佑輔	学校名	国分寺市立第四小学校
実施学年	小学校2年生	教科	国語
単元名	人をたすける「かしこさ」とは。(『ロボット』光村図書 二年下)		

《学びを深めたいポイント》

子どもたちが「人間を助けてくれるロボット」について考え、場面や役割、タイミングなどを具体的に想像しながら、文章や絵で表現する活動を通して、創造力や表現力を育むことを目指した。

本学級の児童は、2学期から SKYMENU を用いた学習活動に取り組んできた。担任への教師用タブレット端末の配布が2学期初頭であったため、1学期中は授業者が SKYMENU へログインすることすらままならず、授業での ICT 活用場面は皆無であった。昨年度中に SKYMENU に触れていた児童であっても大きなブランクが生じてしまっていたのである。そのため、デジタル機器の活用には慎重にならざるを得なかった。

本単元は、SKYMENU をはじめとしたデジタル学習媒体を活用する場面を漸増させる途中過程での実践である。本レポート執筆時点(3学期末)では SKYMENU 上での振り返り活動も行っているが、本実践においては、単元を三分割して学習計画を示し、発表ノートの配布も3回に分けて行っている。本レポートで報告する第三次では、児童が「人間を助けてくれるロボット」について、教科書本文を参照しながら紹介文を書いている。発表ノートへ文字入力するだけでなく、ペン機能を使って絵を描くことや、写真を撮って挿入することも想定して学習活動を計画した。そうすることで、多様な学習方法で児童の興味関心を担保しながらも、興味関心に合った方法で紹介文の論を補強することが可能となるようにしている。

《SKYMENU 活用のポイント》

SKYMENU を活用して児童が自分の考えをタブレット上で整理・記述し、クラス全体で共有することで、多様なアイデアや視点を可視化し、互いの発想を広げることができた。

「マイ活用」にて報告している通り、本学級の児童は2学期初頭から4段階に分けて SKYMENU の操作に順応してきている。第一段階として、まずは SKYMENU に対する好印象を醸成した。スタンプやペンによって、思いのままにお絵描きする時間を設けることで、発表ノートは自らの思いを安心して表現できる場であることを確認した。第二には、教師による一定の指示の下で色を塗るという学習活動を展開した。方法にかかわらず、発表ノートに文字を書き入れることはハードルが高い。そこで、色を塗るという直感的な方法で自らの考えを表出できるようにした。第三段階では、一文字単位での文字入力を導入した。手書き入力の方法を紹介し、ローマ字を未習である小学2年生の児童でも自らの考えを文字で表せるようにした。そして、最終第四段階の入口となるのが本実践である。

本単元では、紙のノートの一部を SKYMENU の発表ノートで置換することを目指した。タブレット上で自身の考えを記述することで、推敲が容易となる。文字が容易に削除できることが必ずしも学習効果の向上に寄与するとは限らないが、思考を文字言語化することのハードルを下げることはできたと考えている。また、多彩なペンを用いたお絵描きを可能にしたことも活用のポイントである。文字だけでは思考を表出できない児童であっても、絵であれば考えを表すことができる。また、絵は紹介文の内容を補足する情報としても機能する。児童の興

味関心を持続させつつ、論旨を補強するものとしてお絵描きも許容したこともポイントである。

《実践内容》

	学習活動	SKYMENU 活用場面	活用のポイント
導 入	○本時の流れを確認する。 ・事前に配布している単元計画表で本時の内容と目標を確認する。	○本単元においては、単元計画表は紙媒体で配布した。次々単元より、振り返り欄と一体化させた単元計画表を発表ノートで配布した。参考として下に添付する(※1)	○児童実態を踏まえ、振り返りは紙媒体で行うこととした。文字入力へ十分に慣れていない状態で、振り返りとして発表ノートへ文字入力を強いることは、振り返りの効率を下げ、学習効率を低下させると判断した。
展 開	○自由進捗で発表ノート上の課題に取り組む。 ・単元計画表における第三次(第7時~第9時)の内容を児童自身が選択し、自らの進捗に応じて学習課題へ取り組む。時間ごとに発表ノートのページを分けて提示した。第三次であれば、表紙と合わせて4枚のページを配布した。(※2)	○各自で発表ノートの取り組みたいページを開き、学習課題へ取り組む。 ・各児童が適宜ページを開いて課題へ取り組む。学習進捗によってページを複製したり、以前のページを参照したりして、思考→表出(言語化)→推敲→共有→思考という螺旋状の学びが生まれるようにする。	○文字を入力する場合には手書き入力を原則とするが、必要に応じてタイピング入力やペン機能による手書きも許容する。指導事項を踏まえると、必ずしも文字の入力方法にこだわる必要はない。それぞれの児童が直感的に操作できるという発表ノートの利点を生かし、その場面に応じた思考の表出を許容する。 ・児童が提出した発表ノートの一部を下記に示す。(※3)
ま と め	○本時の学習を振り返る。 ・事前に配布している単元計画表に振り返りを記入する。	○提出箱を一覧し、学びを紹介する。 ・事前に当該児童の許可を得たうえで、学級全体に寄与する学びを紹介する。本時であれば、紹介文と対応する絵を描いて論を補強している児童の発表ノートを紹介した。	○提出箱について、児童同士で提出物を閲覧できる設定にはしていない。本学級の児童の中には、他者に自らの考えを見られることに対して強い拒否感を覚える児童もおり、提出物を自由に閲覧できる環境では心理的安全性が担保されない。教師が学びを共有し、価値づけることの意義を示すことはもちろんであるが、それ以前の問題として、当該児童の許可を得ていない提出物の共有は行わない。

※1 【参考】発表ノートを用いた、振り返り欄一体型単元計画表（本単元では使用せず）

④まどからのぞきこんだときの気もちを聞き合う。

③自分の問いをかいけつする。

②ぎ問をもとにして、問いをきめる。

①もの語のせつていをかくにんする。

○学しゅうのながれをかくにんする。

0

バーを大きく
SKYMENU

※2 第三次で配布した発表ノート

国語

『ロボット』

7 ~ 9

ペン
あ
文字・数式
消しゴム
素材
撮影
教材・作品
資料置き場
バーを小さく
SKYMENU

◎どんなロボットがあればよいか考える

バーを大きく
SKYMENU

◎ロボットがいる場所のせつめい

◎ロボットができることのせつめい

◎ロボットがたすけてくれるときを考える

バーを大きく
SKYMENU

◎ロボットがたすけてくれるタイミング

◎ロボットがたすけてくれないよう

◎しょうかい文を書く。

◎人間をたすけてくれるロボットのしょうかい文を書く。

バーを大きく
SKYMENU

※3 【抜粋】児童が提出した発表ノート

◎しょうかい文を書く。

◎人間をたすけてくれるロボットのしょうかい文を書く。

ロボットは人を助けしてくれる賢い機械です。
僕が考えたロボットは保険ロボットです。
このロボットは病院の各フロアにいます。
また、このロボットの形は人型モードと
ベッドモードがあります。
ベッドモードは骨折したり意識不明の人を
病室に運ぶのです。
また、人型モードはけがをしてる人を
看病するのです。

スライドショー
マーキング
消しゴム
拡大
縮小
次のページ
前のページ
名前を表示
すべて
消す

◎ しょうかい文を書く。

◎ 人間をたすけてくれるロボットのしょうかい文を書く。

きょうりゅうロボットは、じこがおきたりじしんでけがをしたした人がいるばしよでにおいで人をたすけます。

けがをしたひとがみつからないとき、においで人をみつけます。



◎ しょうかい文を書く。

◎ 人間をたすけてくれるロボットのしょうかい文を書く。

びょういんでうけつけをしてくれるロボットです。

このロボットはしゅじゅつがおわったとき、かんじやさんをよんでその人に見ぐすりをわたしてくれます。また、びょういんで、べつのうけつけをするときもあります。たまにびょういんのしゅじゅつをすることがあります。また、かんじやさんの人数が多いと、時間がかかるかもしれません。

このロボットがあれば時間がかかるば合でも時間がかからないですみます。



《実践を振り返って》

SKYMENU の活用により、児童一人ひとりの考えを可視化し、互いのアイデアを認め合うことで、創造力や表現力の向上につながった。今後も ICT を活用した学びの場を広げていきたいと考えている。

参考として、本単元実践以後の SKYMENU を活用した単元の概略を述べておく。国語科『ロボット』を扱った本単元では、発表ノートを三回に分けて提示し、紙媒体のワークシートの一部を発表ノートで代替することを目指した。その後、『スーホの白い馬』では、単元で使用する発表ノートを一度に配布し、発表ノートの構成からも単元の流れが掴めるようにした。また、各ページの右上に対応する授業時間（例：第3時であれば③）を記載し、単元計画表と対応させながら学習できるようにしている。小学校第二学年国語科において最後となる物語文の単元において、一貫して発表ノートを用いた実践ができたのは、本単元において発表ノートを用いた自由進度学習が成功裏に終えられたからであろう。その点においても、本単元における SKYMENU の活用は有効であった。

一方で、SKYMENU の活用を強制しないということの重要性も改めて感じられた。発表ノートを配布する際には、同内容で紙媒体のプリントも用意し、児童自身が学習媒体を選択できるようにしている。たしかに、デジタル媒体として SKYMENU を活用することには一定のメリットがあるだろう。しかし、それが児童にとって必然性のある学習媒体選択となっているのかについては検討しておかなければならない。本単元の実践においても、プリントと発表ノートを適宜選択しながら学習を進める児童の姿が見られた。本来、学習媒体は学習者自身が選択できるものであるはずだ。SKYMENU を活用することの大きなメリットを踏まえつつも、デジタルにもアナログにも開いた学習活動を展開していきたい。

上述した通り、本単元では互いのアイデアを認め合うことで創造力や表現力の向上につながったと考えている。それは、発表ノートが一定の可塑性を備えた媒体であるからだろう。文字入力や意見表出の方法が多様にあることで、児童が自らの実態に応じて学習方法を選択することができていた。媒体に対して学習者が合わせるのではなく、児童の実態に応じて発表ノートという媒体が変化し得るからこそ、本単元の実践が可能になったと考えている。今後も、児童実態の変化に応え続ける優れた学習媒体として発表ノートをはじめとする SKYMENU の教材を活用していきたい。